

思いを馳せて

獅子の少年

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なにも知らない少年。

ただ彼は不思議な力と謎の記憶を持つていた。

ある日、彼はある男に養子として引き取られ、自分が魔法使いであると知る。
彼は己の中にある謎の記憶と与えられた使命。
それらとともに魔法界に飛び込んだ。

第
1
話

目

次

第1話

そこには死のにおいが確かにあつた。

おぞましく、常人ならば吐き気が込み上げてくる光景。

そこに僕は立つてゐる。右手に血のついたナイフを、左手には血をしたたらせながら立つてゐる。

僕の周りには不快なにおいを放つ血まみれの肉塊が転がつていて、視線の先には冷たくなつた老体の男が倒れてゐる。

その男は一滴の血も流さずに死んでいた。

その体のどこにも傷跡はなく、ただ眠つてゐるようにしか見えない。

しかしこれは僕がやつしたこと。

そして命を刈り取る手応えはあつた。生者が懸命に生きようと力強く脈打つていたあの心臓を握りつぶす感触を、僕の肉体ではない体がしつかりと覚えてゐる。

そして僕の手のひらには潰れた小さな肉の塊が握られている。それは心臓だつた。

「リオン、食べて」

グルグルと喉を振るわせてゐる白狼に左手に持つた肉を与える。白狼——リオンと

「うう僕の友達——は大きく口を開けて餌を求めているので望みどおりに喰わせてやれば嬉しそうに鳴く。リオンが食べ終えるまで部屋中の金品に目星をつけておこう。そう思つてキヨロキヨロとしていると左手がくすぐつた。視線を向けるとリオンがペろペろと血を舐めとつていた。

「きれいに、なつたよ」

よしよしと撫でると尻尾を左右にを振る。余程食事に満足したと見える。その白い立派な毛を撫でているとふと思いついた。はたして彼とはどれくらいの付き合いになるのだろうかと。その答えを探る為に多くある記憶の海からひっぱり出せたのは薄汚い街路にリオンと僕が立つていて記憶だつた。そう一番古いであろう記憶にはいた。たしかその記憶は四歳の時だから少なくとも6年の付き合いにはなるのだろうか。
……ずいぶんと寂しい人生だな。と記憶がそう判断した。

これが僕に与えられた現実。

リオンと才能以外に天が僕に与えたものはない。

暖かい家庭も、美味しいご飯も、優しい家族もない。

ただ日々を生きるために他人の生き血を啜り、命を屠つて生きている。

「仕事、おわった」

いつもの言葉。何度も口にした言葉。

それは死者に向けてつぶやいているようにも思える。

ただその言葉には諦念と絶望も含んでいた。

それは子供が抱いてはならない負の感情。

……子供は宝という。ゆえに純粹に純真に希望を抱いて成長しなければならないのだから、こんなことがあつてはならないはずだろう？

だけど僕は何も知らない。教えてくれる親も大人もいなかつた。僕が大人に教えられたことといえば、底辺に生きる人間の生き方と人の殺し方だけだ。文字の読み書きもなげなしの金をはたいて買った本で学んだ。

そして僕は死者に気をつかうなどという余裕はないから平氣で死体の衣服で刃に付着した血をぬぐうし、高価な腕時計や換金できるものを剥ぎ取り、満足する量に達すれば急いでその場を後にするということを日常として、生まれてからはずつとそうやって過ごしてきた。

……ああ、どうしてこんなことに。

通り慣れた酒場に帰つたきた。

その薄汚れた店内には相応の客がいる。つまり汚い大人の掃き溜めということだ。

そいつらはもう朝日が昇つたというのに、下品な笑い声を上げて酒を飲み、賭け事をし、喧嘩沙汰を起こしている。

そんな大人たちの横を通り過ぎて店主に向かいのカウンターに座る。そして淡々と奪い取ってきた金品を古びた木のカウンターに並べていく。

「仕事、完了。これ、換金して」

僕がどうして酒場なんかにいるかというと、ここがねぐらでもあるし、なによりこの酒場では様々な依頼を持つてくる依頼者がいて、その依頼をこなして報酬を受け取るというゲームにあるようなギルドの仕事も担っているからだ。ただゲームと違うのは扱つてるのが暗殺、強盗、誘拐などの裏稼業だということだけだろう。

そしてここの中の店主のダンは俺を拾い寝床などを提供してくれた人もある。ただそれだけを聞くと善人の様に思えるが、その実僕に生きる術を教えるだけ教えて利用しているという利己的な人間だ。

僕と同じような子供も何人かいるが僕以外は店の掃除や給仕の仕事などをさせられ、おまけに大した給料も与えられない。まあここで衣食住を保証してもらえるだけ運がいいのだが。

だから僕は依頼の報酬以外にも小遣い稼ぎをしているというわけだ。いつかこの地獄から抜け出すために。

「ああ。……お前さん今回の仕事場所は？」

どうしたのだろうか。なぜそんなことを聞くかは分からぬが、今回の依頼は確か隣町の豪邸に住む貴族然とした男だつたはずだ。とりあえず少しほかして話をしよう。

「近くの町にある、金持ちだつた」

「……隣町か、そこの貴族か？」

「そう、だと思う」

ダンは何かしらの確信を持つてゐるようだつた。それもあきらかにやばい手合いだつたのだろう。表情筋が死んでると噂されてるダンが険しい顔をしたのだからそういうことに違ひないのだろう。

ダンの異変に気付いた酔つ払いたちがカウンターに寄つてきた。その酒臭さと高いテンションに不快さを感じてると酔つ払いは物怖じせずにダンに話しかけた。

「おう、マスター。なんかあつたのか？ 辛氣くせえ顔しやがつてよお、酒が不味くなるじやねえか」

「……」のガキがやらかしやがつたんだよ。ここらを治めてるギボン家の旦那をやつちまいやがつた

ダンの話は不思議と店内に響き、騒がしかつた酒場が静まり、みんながダンに注目してゐる。思つていたよりもすごい人物なのかもしれないと考えるとこの先が不安になつ

てきた。

「なに？……そんな冗談は言うもんじゃねえぜ。こんなガキがどうやつて殺したってい
うんだ」

「……おそらくあれだ、魔法だろう。こゝらで不自由してないってことはちゃんと魔力
があるってことだろうからな」

「おいおい、それこそありえねえな。まだホグワーツにも通つてねえし、そもそも11歳
にすらなつていらないんだろ？」

彼らがなんの話をしているのかはわからないが、自分のことを話してるのは理解でき
た。ただ本で読んだ魔法なんて単語が出てきたから混乱してきた。彼らはまるで魔法
を存在する様に話を進めている。

Q. 魔法は存在するのか？

A. いいえ。そんなものは存在しません。

これが一般人の答えだろう。実際そんな質問をしたところで返つてくるのは馬鹿馬
鹿しいという感想だけなのだろうが。

第一そんなものがあれば世界はとつ々の昔に支配されているのではないのだろうか。
ただ何か問題を抱えているという可能性もあるが……。

今、僕はいったい何を考えていた……？この考え方は魔法の存在を肯定しているよう

なものじやないか。

だが僕自身、説明のつかない力の存在は知っていた。その力を行使していたのだ。それが魔法だと言われてみれば納得できないこともない話ではあった。

「それよりマスター。こいつが魔法を使えるか使えないかはどうでもいい。問題は魔法省だ。今まではこここの存在は無視されていたが純血の家系が殺害されたとなつちやあここに踏み込んでくるのは道理だ」

その一言で酒場中が騒がしくなった。怒声、罵声、悲鳴が入り混じり阿鼻叫喚というのがご相応しいのだろう。

そうしてその様子を見て不快感を隠せないダンが口を開こうとした瞬間にギシギシと音を立てて老朽化した木製のドアが開いた。

誰もがその存在を見てこう思つただろう。
——この場に相応しくないなど。

そこに立つていたのは杖をついた壯年の男性だつた。その男は青白い肌をしており、伸ばした金髪を後ろに流している。そして手に持つてるのは蛇の意匠を施した杖ではあるが、足腰が弱いというよりはおそらく威厳を見せるためにもつているのであるう。

現にその男からはあの老人——ギボンだつたか——の持つ霸氣ともいうべきオーラ

を持つてゐるからだ。

いつも強気な無法者たちが怖じ氣付いてゐるなかで、ダンはいつもと変わらない不機嫌な様子で何の用だと問いかける。

だがその男は無言で近づいて、ダンの前に立つとようやく口を開いた。そうすることにより自分の存在をこの場の誰よりもふさわしいと示すことができると思つてゐるようだつた。

「私はルシウス・マルフォイ。そしてロージエン・ギボンの友人だ。今日は込み入つた話があつて屋敷を訪ねたのだが、ロージエンは何者かに殺害されてしまつたようなのによ。つい数時間前に」

その男——ルシウス・マルフォイは厳肅に淡々と自身の紹介をする。そしてわざとなのか声色を低くして喋つている。この静かさを好むかのように。

だが誰もが守つていた沈黙は破られた。

マルフォイ、それには特別な意味と力があるようだつた。

なぜなら皆が口々にそのフレーズを復唱したからである。

あのダンも驚いたのか目を見開いていたがやがて目を細めてもう一度、何の用でしょうか?と問いかける。

「それはその犯人がこの酒場にいると考えてゐるからだ」

「……なるほど。ではどうしてここにいるのだとお考えに？」

「分かりきつたことではないか。あのギボンめを殺めたところでこの寂れた街には不利益しか生じない。それに誰が手を出すというのだ。……だがそれでもギボン殺害に価値があるというのならその限りではないだろう?」

「……つまり貴方はここに持ち込まれた依頼でギボンの旦那が殺害されたとお考えにられたのですか」

「そうだ。そして依頼を達成したものは報酬を受け取りにここにくる。違うか?」

「……ええ。その通りでしょう。それでは貴方はギボンの旦那を殺害した下手人を探しにいらっしゃったのですか」

「ああそうだとも。もし教えてくれたのならばここに向かうであろう魔法省の矛先をそらすこともできるのだがね……」

皆の視線がこの幼い体に突き刺さる。まずい流れになつていて。このままでは最悪殺されてしまうかもしれない。

そう、狂った法廷で行われる魔女裁判に突き出された哀れな民のように慘たらしく処刑されてしまふかもしれない。

そして悲しいことにルシウス・マルフォイと目が合つてしまつた。

「ん? そこの少年はなんなのだ? こんな酒場に平然と居座つて……。オークションに並

んでいないのが不思議だな?」

「……そこの子供は捨て子です。ちょうど人手が足りなかつたので拾いました。似たような境遇の奴も他に何人かいますか」

「ほう。だが格好からして他の給仕たちとは違うようだが?」

重々しく、張り詰めた空気。この場を支配する重圧に敗北した誰かが声を上げた。

「そいつだ! そこのガキがギボンさんを殺したんだ。さつきその話をしてたのを聞いたぞ!!」

一人が根負けしたことで他にも便乗する大人が出てきた。いつも態度がデカいくせにこういう時は小心者のように騒ぎ立てる大人たちが滑稽で笑いそうになるが、自分被置かれている現状を思い出すと笑いなんてどこかに消えてしまった。やつぱり大人は嫌いだ。

そんな感傷に浸つていると目の前にルシウス・マルフォイが身長の差から見下ろす形で立つていた。

「どうかどうか。君がギボンをやつたのか。だがどうやつてやつたのだ?」

「説明、できない」

「なぜ? どうして? それには何か事情があるのか、それとも自分でも説明できないのか?

?」

答えを濁す僕に迫るルシウス・マルフォイに困つているとダンが助け舟を出してくれた。

「そいつがおそらく魔力を持つているからです。この町に捨て子を置いていくのは魔法使いか、ここらを廃墟と認識しているマグルですから」

なるほどとルシウス・マルフォイは呟くと暫しの間思考を巡らせていたようだ。彼はその頭の中で何を考えているのだろうか。僕の処分についてか、はたまたギボンとの話が出来なくなつたので今後について頭を捻つているのだろうか。

そうしてようやく口を開いたと思つたら、ルシウス・マルフォイは信じられないことをいつたのだ。

「彼の身柄をいただいても構わないかな？」

「……それはガキを処すということでしょうか？」

「いいや違う。私が彼を養子として引き取るという事だよ」

僕はきっとその時、とても間抜けな顔をしていたのだろう。彼が何を目的とし、何を考えているのか全く分からなかつたからだ。だからその疑問をこぼしても不思議ではない。

「なんで？」

「何故も何も当然のことだよ、少年。君自身事情を理解していないようだから言つておく

が、ギボンは魔法族の純血の血筋だ。純血とは当然古い家系でもあり、平平凡凡な魔法使いよりも強いという事だ。その魔法使いを、その護衛たちを殺害したということは君にはそれ相応の血が流れているという事に他ならない」

「つまり、僕の血が、目当て？」

「否、それは違う。その血が無為に失われることがあつてはならないからだ。それは魔法界の大きな損失に他ならない。……だが悲しいことに私は君を利用しなければいけないという事も事実ではある」

大げさに首を振るルシウス・マルフォイのその発言に嘘は無い。つまり彼にとつてこんな薄汚い子供もこの身に流れる血のおかげでとてつもない価値があるという事だ。

「さて少年。君には今選択肢が二つある。私の養子となるか、それとも魔法省に突き出され罪科を待つ身かだ。おそらく法廷では過激な純血派が君の死を要求することだろう。そしてそれは当然のように可決するのは必然的だ」

それは選択肢と言えるのだろうか。死を望む自殺願望持ちじやなければ二つの選択肢もない。当然僕は前者を選ぶしかないのだ。

この男ははじめから僕を手に入れる気でいたのかもしれない。そういうえばギボン殺害の依頼の報酬は大量の金貨の量が記載されていた。たしか聞いたことのない金貨だつたが——ガリオン金貨といったか——それが千枚と記載されており、換金すれば相

当なものだろうと思ひ引き受けたのだ。

この依頼を出したのがこのルシウス・マルフォイなら僕は嵌められたということか。いやよそう。そんな話を言つたところで根拠もないし、選択肢が増えることはない。

「わかりました。養子に、なります」

「ああ。いい返事だとも。店主、この少年をいただいても構わないかな？」

「……ええ。どうぞ」

長い付き合いのダン。未だその内心を読み取ることは叶わなかつたが、その顔はどこか喜んでいるように思えた。

「ところで少年、君の名は何という？」

「レナード。レナード・リード」

「ふむ、レナードか。いい名前だな。これなら新しい名前入らないだろう」

彼は僕をどうするのだろう。家でひつそりと拷問をかけるのか。それともここ給仕のようにこき使うのか。わからないことばかりでままならない。

ああ、忘れるところだつた。僕の家族を。

「リオン」

返事をする鳴き声が聞こえるといつのまにか酒場にいたのか。人混みの中を小柄な体で器用に走ってきた。

「レナード。その犬は?」

「僕の、家族」

「そうか。よし、いいだろう。その犬も連れてこい」

「犬、じゃなくて。狼です」

「……まあいいだろう」

狼と聞いて顔を険しくしたが許可はくれた。ただダン以外にリオンが狼と知らなかつたのか。みんなリオンからさつと距離をとつた。

「では行こうか、レナード。新しい家と家族だ。妻も息子も君を歓迎するだろう」

酒場から外に出ると彼は手を差し出し掴まれといった。その指示に疑問を抱きながらも言われた通りにする。

すると周囲の光景がぐにやりと歪み、平衡感覚が失われた。この身を包む不快感が体にさらなる負担をかけ、その苦しみが終わつたのは目の前に大きな屋敷が見えた時だつた。

芝居掛かつた口調でルシウスはこう言つた。

「ようこそ、レナード。新しい家族よ。私たちは君を歓迎する」